# 新島八重・襄・覚馬略年譜

| 西暦年 | 元号年 | 新島八重 | 新島襄 | 山本覚馬 |
|---|---|---|---|---|
| 1826 | 文政9 | | | 2月25日(新暦)、会津藩士・山本権八と佐久の長男として会津若松米代四ノ丁に生まれる。 |
| 1836 | 天保7 | | | 会津藩校・日新館に入る。 |
| 1843 | 天保14 | | 2月12日(新暦)、上州安中藩祐筆・新島民治ととみの長男として江戸神田一ツ橋の安中藩邸で生まれる。 | |
| 1845 | 弘化2 | 12月1日(新暦)、会津藩士・山本権八と佐久の子として会津若松米代四ノ丁に生まれる。 | | |
| 1850 | 嘉永3 | | | 江戸に赴き、佐久間象山の塾に入る。武田斐三郎、勝海舟とも交流する。 |
| 1852 | 嘉永5 | | | 再度、江戸に出て、大木哀 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 1856 | 安政3 | | 藩主板倉勝明に抜擢され、田島順輔に蘭学を習う。 | 域(忠益)から蘭学を学ぶ。会津に戻り、日新館で砲術などを教える。蘭学所を設け、教授となる。 |
| 1860 | 安政7<br>万延元 | | 幕府の軍艦教授所(軍艦操練所)で数学・航海術を学ぶ。 | |
| 1863 | 文久3 | | 英学を始める。 | |
| 1864 | 文久4<br>元治元 | | アメリカ商船で函館から密出国。 | 京都守護職に就任した藩主(松平容保)に従い上洛。蛤御門の変では、砲兵隊を率いて、長州藩と戦う。 |
| 1865 | 元治2<br>慶応元 | 但馬・出石藩士(蘭学者で砲術家)の川崎尚之助と結婚。 | 7月20日、ボストンに入港。 | |
| 1866 | 慶応2 | | アンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受ける。 | 眼の治療と鉄砲の買い付けのため、長崎に赴き、外国人医師(A・J・ボードウィン)、商人(カール・レーマン)に接触。 |

| 西暦年 | 元号年 | 新島八重 | 新島襄 | 山本覚馬 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 1868 | 慶応4<br>明治元 | 戊辰戦争(鳥羽伏見の戦)で兄・覚馬は幽囚、弟・三郎は戦死。戊辰戦争(会津戦争)で鶴ケ城に籠城し、藩主・松平容保のために西軍と戦う。男装し、スペンサー銃と大砲を操った。父、一ノ堰で戦死。敗戦後、夫の川崎は東京に送られ、離別を余儀なくされる。 | | 鳥羽伏見の戦で、洛東・蹴上において薩摩軍に捕らえられ、薩摩藩邸に幽囚。 |
| 1869 | 明治2 | | | 幽囚中、『管見』(山本覚馬建白)を口述筆記させ、薩摩藩に差し出す。京都府顧問に就任(1877年、解職)。 |
| 1870 | 明治3 | | アーモスト大学で理学士の学位を受ける。 | |
| 1871 | 明治4 | 母(佐久)、姪(峰)と兄を頼って入洛 | | |
| 1872 | 明治5 | 覚馬の建策で生まれた女紅場に権舎長兼教導試補として就 | 岩倉使節団に三等書記官心得、理事官随行として協力 | 京都博覧会開催(以後、毎春)。阪神地方から入洛し |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 職。 | することが決定。 | た宣教師と接触し、毎春、キリスト教を学ぶ。八重にも英語とキリスト教を学ぶことを勧める。 |
| 1874 | 明治7 | | アメリカン・ボード日本ミッションの準宣教師に任命される。アンドーヴァー神学校卒業。11月26日、横浜入港。 | 新島襄の訪問を受け、キリスト教学校設立の支援を約束。校地として、開拓会社所有の薩摩藩邸跡地の払い下げを斡旋する。 |
| 1875 | 明治8 | 10月、新島襄と婚約。11月、それに伴い、女紅場教員を解職。 | 4月、京都で槙村正直京都府大参事(後に知事)や山本覚馬らと面談。覚馬から学校を京都に「誘致」される。8月に覚馬と共同で私塾開業願いを京都府に提出。11月に同志社英学校開校。社員(理事)は、新島と覚馬のみ。 | |

| 西暦年 | 元号年 | 新島八重 | 新島襄 | 山本覚馬 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 1876 | 明治9 | 1月2日、プロテスタントの洗礼を受け、翌日、新島と結婚。一時、私宅で女子塾を開く。のち、宣教師が開いた女子塾を手伝う。12月新島家に設けられた教会(初代牧師は新島)に教会員として加入(以後、永眠まで)。 | | |
| 1877 | 明治10 | 宣教師の女子塾が同志社女学校となる。母と手伝う。 | | |
| 1878 | 明治11 | | 自宅(「新島旧邸」として現存)を新築し、引っ越す。 | |
| 1879 | 明治12 | | 同志社英学校を大学に昇格させる運動に着手。 | 京都府議会を開設。初代議長に就任(1880年まで)。京都商工会議所を設立(1885年に二代目の会頭に就任)。 |
| 1882 | 明治15 | 夏に新島と会津若松を訪ねる。 | | 新島の二度目の欧米旅行中、校長代理。 |
| 1884 | 明治17 | | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1885 | 明治18 | | | | 夫人(時栄)と共に同志社の宣教師から洗礼を受ける。 |
| 1890 | 明治23 | 新島、永眠。 | 1月23日、急性腹膜炎で永眠。享年46歳。27日、同志社チャペルでの葬儀後、洛東・若王子山頂に埋葬 | | 新島の死去に伴い、臨時総長。 |
| 1891 | 明治24 | 日本赤十字社に加入(のち、幹事)。 | | | |
| 1892 | 明治25 | | | | 12月28日、自宅(河原町三条上ル)で永眠。享年66歳。同志社チャペルでの葬儀後、洛東・若王子山頂に埋葬。 |
| 1895 | 明治28 | 日清戦争中、広島で篤志看護婦。のち、宝冠章を受章。 | | | |
| 1905 | 明治38 | 日露戦争中、大阪で篤志看護婦。 | | | |
| 1924 | 大正13 | 同志社女学校視察の貞明皇后と面談。 | | | |
| 1931 | 昭和6 | 会津若松の山本家菩提寺(大龍寺)に山本家の墓を建てる。 | | | |

| 西暦年 | 元号年 | 新島八重 | 新島襄 | 山本覚馬 |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 1932 | 昭和7 | 6月14日、急性胆のう炎により、自宅で永眠。享年86歳。17日、同志社校葬（社葬）後、洛東・若王子山頂に埋葬。 | | |

# 会津烈婦新島八重略伝

笠井　尚

## 新政府軍来襲と八重

新島八重の八十六歳の生涯において、もっとも鮮烈な印象として残っていたのは、やはり会津戦争であったようです。それだけに、晩年になってからの話題は、決まってその時の思い出話でした。

会津戦争のときの八重は二十四歳になっていましたので、それ以前に、兄山本覚馬（かくま）から、銃や大砲の撃ち方の手ほどきを受けていました。男と変わらない教育が施されたのは、会津藩の開明派であった兄覚馬の影響を無視することはできません。

八重がスペンサー銃を手にして戦ったことや、大砲隊を指揮した逸話が語り草になっていますが、単なる男勝りというよりも、洋学へ目が開かれていたために、武器に関心を持ったのです。会津の婦女子の多くが、薙刀（なぎなた）を手にしていたなかで、八重はあくまでも例外

中の例外でした。だからこそ、なおさら目立ったに違いありません。

明治四十二年（一九〇九）十一月に発行された『婦人世界』のなかで、籠城戦について、「男装して会津（若松）城に入りたる当時の苦心」という題で、八重自身がインタビューに答えています。「私の実家は会津候の砲術師範役でございましたので、御承知の八月二十三日、愈々立籠もることになりました時、私は着物も袴もすべて男装して、麻の草履を穿き、両刀を手挟んで、元込七連発銃を肩に担いでまいりました」と当時を回想するとともに、「他の婦人は薙刀を持っておりましたが、家が砲術師範で、私もその方の心得が少々ございましたから、鉄砲にいたしたのでございます」とわざわざ断っています。

その着物や袴というのは、鳥羽伏見の戦いで弟の三郎が討死したおりの形見で、それを着て、「一は主君のため、一は弟のため」という決意で、若松城に入ったのです。その際に八重は、壮絶な光景を目にしたのでした。「ある御婦人などは、白無垢に生々しい血潮の滴っているのを着ておられました。それは多分家族に卑怯者があって、城中に入って戦うのは厭だという者を手に掛けて、その足で参られたのでございましょう」。殺気だっている様子を目にしながら、少しも動ずることのない八重というのは、烈婦と呼ぶにふさわしい女性であったのです。

でした。とくに、大変であったのは、兵隊たちの食事の準備です。炊き立ての御飯が熱くて、手の皮がむけそうになっても、水を付けて女たちは必死に握ったのでした。水の中に落ちた御飯も捨てはしません。それはお粥にして、負傷者に食べさせました。そして、黒くこげたところや、土に落ちた御飯を集めて、それを女たちが食べたのです。

弾丸を弾丸方に運ぶのも、力仕事なので、八重にとってはお手の物でした。しかも、気がたっているせいか、平日であれば、一箱でも大変なのに、二箱も三箱も肩に担いだというのですから、まさしく火事場の馬鹿力です。それでも、「私は十三歳のとき、四斗俵を肩に上げ下げしました」（『婦人世界』）と自慢している位ですから、八重はへこたれることはありませんでした。

入城時の八重の立場は、側女中見習いでしたが、二十五日には側女中格になりました。そのときのことです。十三、四歳のあどけない子供たちの調練を見たのは。その子供たちに「お八重様。戦争をするのなら、連れて行って下さい」とせがまれたのでした。一度にどっとすがりつかれたので、八重も戸惑ってしまいましたが、子供たちの一途な思いに、涙がこぼれてならず、「戦争の時は知らせて上げるから、それまでは大人しく待っておいでなさい」と言うのが精一杯でした。いくら八重が側女中格であっても、その服装や振る

見の戦い）が勃発し、会津藩は敗戦の憂き目に遭います。覚馬は、薩摩藩に捕獲され、薩摩藩邸に幽閉されました。この間、目と脊髄をやられて、失明し、歩行できない身体障害者となります。

しかし、幽閉中に作成した『管見』という建白書が、彼の開明性を立証するところとなり、京都府に取りたてられて、知事顧問となります。覚馬から誘致される形で、新島は一八七五年に同志社英学校（男子校）を思いがけなくも京都に開くことができました。さいわい、神戸にいたJ・D・デイヴィスなどの同僚宣教師の協力も得られました。

## ハンサム・ウーマン

八重は、この新島と巡り合って以来、彼の同僚宣教師たち（アメリカ人）やその家族と交際を深めました。そのころから洋装を好むようになったのでしょうか。帽子やハイヒールが好きでした。「古都のモダン・レイディー」の誕生です。自転車を乗りこなした、との伝承もあります。が、真偽のほどは、不明です。

八重と新島の婚約が、知事に知れるや、八重は府立女学校をクビになってしまいます。

キリシタン禁制が解除されて、ようやく三年目のことでした。キリスト教への不信感と嫌悪感は、依然として強かったのです。とりわけ、伝統宗教の中枢とも言うべき京都は、別格です。

八重は、差別やイジメをまったく意に介さず、翌年正月（一八七六年一月三日）に結婚に及びます。その前日に、八重はデイヴィスから洗礼を受け、京都初のキリスト教（プロテスタント）信徒になります。未知の世界へ敢然と、真っ先に飛び込む勇気は、いつの時代でも八重を特色づける大きな特徴です。

新島は「クリスチャン・レイディ」となった八重を「ハンサム・ウーマン」と見ます。彼は、見た目よりも心を重視する生き方を「ハンサムに生きる」と形容します（この指摘と表現は、NHK「歴史秘話ヒストリア」で八重を取り上げた押尾由起子ディレクターの卓見です。「ハンサム・ウーマン」という用語に著作権があるとすると、彼女にあります）。

新居は、現鴨沂（おおき）高等学校東南角の辺りにあった借家（岩橋家）です。大阪を引き払って入洛してからの新島は、山本家に下宿するか、旅館に泊るか、のどちらかでした。独身時代の最後は、岩橋家を借りて独居しました。新島はここへ新妻を迎えるわけです。

## 女子教育

この新居で、八重は宣教師夫人の力を借りながら、近所の子どもたちを集めて、一時期、女児の私塾を開きます。集まった中に、男の子がひとり、混じっていました。

この年（一八七六年）、女性独身宣教師が初めて京都に送り込まれ、宣教師宅に女子のための学校（京都ホーム）が立ち上げられました。今の同志社女子部の前身校です。一八七七年には同志社女学校と改称され、校長に新島襄が就きました。学校はやがて、現女子部今出川キャンパスに移転します。

八重は、出来たばかりの京都ホームを手伝います。ついで、母親（佐久）や宣教師夫人ともども、同志社女学校も助けます。母親同様に、寄宿舎に住み込む時もあったでしょう。

## 新島旧邸

一方、自宅ですが、一八七八年に今の「新島旧邸」（一般公開中）が竣工します。初のマイホームです。十四年間にわたった襄との夫婦生活を含め、八重はここで五十数年間、

それから古くは、会津若松に官幣社であった養蚕神社というものがありまして、古代から最近まで生糸が盛んだったことが理由だと思います。

本井　今のお話を引き継ぎますとね、京都の女紅場という日本初の公立女学校で、八重はキャリアウーマンとして働きます。この学校で養蚕、あるいは生糸織物を教えます。これは会津ゆかりのものじゃないでしょうか。彼女自身が会津でそうした経験を持っていたのか、どうかですが、今お話を聞くと、会津時代に、すでにそういう体験なり、指導を受けたりした、ということがあったんでしょうね。

早川　これは資料的には私はつかんでいませんが、実は会津の士族といいますけれど、上級士族は信州の高遠から来た人がそうで、それ以外は全国から集められた士族が下にいるわけです。山本家はどうも高遠ではないようです。それで一時期、山本家は山本勘助の子孫だということを名乗っていた時代があるんです。ですけど、山本覚馬は言わなかったみたいです。

これは数年前の大河ドラマで、山本勘助のことを調べた人がいまして、本当ではないということをＮＨＫも分かったのか、そこでは取り上げられませんでした。会津藩は高遠の三万石か最上に行って二十三万石になり、会津に来ましたので、寄せ集めの集団で

本井　八重さんの信仰をどう見るか難しいですね。同志社教会（新島が作った教会です）に籍を置きながら、別の教会（京都教会）にもちょくちょく行っています。京都教会は、同志社教会に少し遅れてできた老舗（しにせ）の教会です。

何でかというと、そこの牧師が好きだったんです。人間的なつながりが濃かったからか、あるいは同志社教会では、人間関係がつくりにくかったのか、よくわかりません。

ただ、同志社の卒業生である牧野虎次という牧師を慕って京都教会へ行ったりしました。牧野には、「死んだら、あなたが葬式してよ」と言っております。最終的に学校葬（同志社の学内での）でしたから、京都教会でお葬式をすることはなかったんです。同志社教会でもないですよ。こういうところを見ると、ワクに囚われないのが、彼女の八十六歳の人生ですよ。男っぽいし、何を言われても気にしない。肝っ玉母さんですね。

早川　クリスチャンになろうとはしたのでしょうが、それ以上に会津士魂や会津人であることを引きずってしまったというのは、同じ会津人としては嬉しい反面、可哀想な気がします。会津弁が生涯抜けきらないのと一緒で、どうしようもない宿命を感じてなりません。でも、救いといえば天真爛漫であったことですかね。ところで覚馬の片腕となった会津人としては、どんな人がいますか。